のら犬

新美南吉

一

常念御坊（じょうねんごぼう）は、碁（ご）がなによりもすきでした。きょうも、となり村の檀家（だんか）へ法事（ほうじ）でよばれてきて、お昼すぎから碁（ご）をうちつづけ、日がかげってきたので、びっくりしてこしをあげました。

「まあ、いいじゃありませんか。これからでは、とちゅうで夜になってしまいます。今夜は、とまっていらっしゃいましよ。」

と、ひきとめられました。

「でも、小僧（こぞう）がひとりで、さびしがりますから。さい

わいに風もございませんので。」と、おまんじゅうのつつみをもらって、かえっていきました。

常念御坊は歩きながらも、碁のことばかり、考えつづけていました。さっきのいちばんしまいの、あすこのあの手はまずかった。むこうがああきた、そこであすこをパチンとおさえた、それからこうきたから、こうにげたが、あれはやっぱり、こっちのところへ、こうわたるべきだったなどと、むちゅうになって、歩いてきました。そのうちに、その村のはずれに近い、烏帽子をつくる家の前までできますと、もう冬の日も、

とっぷりくれかけてきました。

しばらくしてなんの気もなく、ふと、うしろをふりかえってみますと、じきうしろに、犬が一ぴきついてきています。きつね色の毛をした、耳のぴんとつったった、あばらの間のやせくぼんだ、ぶきみな、よろよろ犬です。どこかここいらの、かい犬だろうと思いながら、また碁(ご)のことを考えながらいきました。

一、二丁(ちょう)いって、またふりむいてみますと、さっきのやせ犬が、まだとぼとぼあとを追ってきています。うす暗いおうらいのまん中で、二、三人の子どもが、こまをまわしています。

「おい、坊。この犬はどこの犬だい。」

子どもたちは、こまを足でとめて、御坊の顔と犬とを見くらべながら、

「おらア、知らねえ。」

「おいらも、知らねえ。」

といいました。

常念御坊は、村を出はずれました。左右は麦畑のひくい岡で、人っ子ひとりおりません。うしろを見ると、犬がまだついてきています。

「しっ」といって、にらみつけましたが、にげようともしません。足をあげて追うと、二、三尺ひきさがっ

て、じっと顔を見ています。

「ちょっ、きみのわるいやつだな。」

常念御坊（じょうねんごぼう）は、舌（した）うちをして、歩きだしました。あたりはだんだんに、暗くなってきました。うしろには犬が、のそのそついてきているのが、見なくもわかっています。

すっかり夜になってから、峠（とうげ）の下の茶店のところまできました。まっ暗い峠を、足さぐりでこすのはあぶないので、茶店のばあさんに、ちょうちんをかりていこうと思いました。

おばあさんは、ふろをたいていました。ちょうちん

だけかりるのも、へんなので、常念坊（じょうねんぼう）は、
「おい、おばあさん。だんごは、もうないかな。」
とききました。
「たった五くしのこっていますが。」
「それでいい。つつんでおくれ。」
「はいはい。」
と、おばあさんは、だんごを竹の皮につつみます。
「すまないが、わしに、ちょうちんをかしておくれんか。あした、正観（しょうかん）にもってこさせるでな。」
「とても、やぶれぢょうちんでござんすよ。」
「いいとも。」

おばあさんは、だんごをわたすと、上へあがって、古ちょうちんのほこりをふきふき、もってきました。

常念坊（じょうねんぼう）は、ちょうちんにあかりをつけると、あたりを見て、

「おや、もう、どっかへいったな。」

と、ひとりごとをいいました。

「おつれさまですかね。」

「いんにゃ。どこかの犬が、のこのこついてきて、はなれなかったんだよ。」

「きつねじゃありませんか。あなたの通っていらっしゃった、あのさきのやぶのところに、よくきつねが

出て、人をばかすといいますよ。」

「おもしろくもないことを、いいなさんな。ほい、おあしをここへおくよ。」

常念坊(じょうねんぼう)はかた手におまんじゅうのつつみと、ちょうちんをさげ、かた手にだんごのつつみをもって、峠(とうげ)にかかりました。その峠をおりて、たんぼ道を十丁(ちょう)ばかりいくと、じぶんの寺です。

もう、あのいやな犬もついてこないので、安心して、てくてくあがっていきますと、やがてうしろのほうで、クンクンという声がします。

「おや、また、あの犬めがきたな。」

と、常念坊（じょうねんぼう）は思いました。

かまわず、どんどんいきましたが、ふと考えました。うしろからくるのは、犬ではなくて、おばあさんがいった、あのきつねがつけてきたのではなかろうか。こう思うと、じぶんのうしろには、ずるいきつねの目が、やみの中に、らんらんと光っているような気がします。気の小さな常念坊（じょうねんぼう）は、ぶるっと、身ぶるいをしました。

でも、うしろをふりむくのもこわいので、ぶきみなりに、ぐんぐん歩きました。なんだかうしろでは、きつねがいつのまにか女にばけていて、今にも、きやっといって、とびついてきそうな気がします。

常念坊（じょうねんぼう）は、そのきつねのことを、わすれようわすれようとするように、ちょうちんのあかりばかりを、見つめて歩きました。

二

やっとのこと、村へきました。村へはいると、すこしほっとしました。村では、どこのうちも、よいから戸をしめてしまうので、どっこも、しいーんとしています。その中で、どこかのうちで、きぬたをうつ音が、とおくにきこえます。

そのとき、ふと気がついてみますと、左手にもっていた、だんごの竹の皮づつみが、いつのまにか、なくなっています。

「おや、しまった。うっかりして、落としたかな。それともきつねのやつが、そっと、ぬすみとってにげたかな。ちょっ。」

常念御坊（じょうねんごぼう）はいまいましそうに、おまんじゅうのつつみと、ちょうちんとを両手にもちわけて、うしろをむいてみました。

もう、なにもおりません。やがて、寺の門の前にきました。立ちどまって、もう一ぺん、うしろをよく見

ますと、きつねらしいものが、のこのこつけてきています。

常念坊(じょうねんぼう)は門をはいると、

「正観(しょうかん)、正観。」

と、庫裡(くり)のほうへむかってどなりました。

「はい。」

とへんじがきこえて、正観(しょうかん)が、ごそごそ鐘楼(しょうろう)からおりてきました。

「おい。きつねだ、きつねだ。ほうきをもってこい、ほうきを。ほうきで追いまくれよ。」

正観(しょうかん)はとんでいって、ほうきをもって、門のほうへ

かけつけました。

「おや。きつねがなにか、くわえていますよ。」

「ああ、だんごだ。とりあげろよ。」

「はい。下へおけ。――だんごは、とりかえしましたが、きつねはすわったきり、にげません。」

「だから、ほうきで追っぱらえというのに。」

「ちきしょう。にげんか。しっ、しっ、しっ。」

と、正観（しょうかん）はほうきで追いまくりました。

「ほうい、ちきしょう。こらっ。」

と正観（しょうかん）は、そっちこっち追いかけて、とうとう外へにがしてしまいました。

「にげたか。」

「にげました。」

「正観（しょうかん）。」

「はい。」

「なんでおまえは、今ごろ鐘楼（しょうろう）なんぞへ、あがっていたのだ。」

「さびしかったから。」

「鐘楼（しょうろう）へあがってれば、さびしくなくなるのか。」

「鐘（かね）をゲンコツでたたくと、おん、おん、おんと、和尚（おしょう）さんの声みたいな音がするんです。」

「なにをいいおる。」

和尚(おしょう)さんは、ころもをぬいで、ろばたで、おぜんにすわって、ざぶざぶと、お茶づけをながしこみはじめました。正観(しょうかん)は、おみやげのだんごを、ひろげました。

「和尚(おしょう)さん。あの犬は、どこからついてきたのです。」

「となり村から、しつっこく、あとをつけてきたのだよ。」

「どうして。」

「どうしてだか、知らないよ。」

「ばかしゃぁ、しませんでした？」

「おれがきつねなぞに、ばかされてたまるかい。」

「きつねですか、あれは。」

「…………」

「犬みたいだったがな。そのしょうこに、正観はそばへよっても、ちっとも、こわくはなかったがなあ。」

常念御坊は、はしをおいて、考えこんでいました。

あんどんのあかりが、そのくるくる頭へ赤くさしています。

しばらくして、常念御坊は、

「正観。」

と、すこし、きまりわるそうにいいました。

「そのちょうちんを、つけよ。」

「はい。」

「わしは、ちょっといって、さがしてくるでな。おまえは、本堂（ほんどう）のえんの下へ、わらをどっさり、入れといてくれ。」

「なにをさがしに？」

「あの犬を、つれてくるんだ。」

「きつねでしょう、あれは。」

「かわいそうに。犬なら、のら犬だ。食いものも、ろくに食わんとみえて、ひどくやせこけていた。はるばる、となり村から、わしについてきたのだから、あったかくして、とめてやろうよ。」

それに、わしの落としたただんごまで、ちゃんと、く

わえてきてくれたんだもの。おれがわるいよと、これだけは心のなかでいって、常念御坊（じょうねんごぼう）は、ちょうちんをもって、出ていきました。

底本：「新美南吉童話全集　第一巻　ごんぎつね」大日本図書
　　１９６０（昭和35）年６月20日初版発行
　　１９７８（昭和53）年７月31日34版発行
初出：「赤い鳥」
　　１９３２（昭和７）年５月号
※底本で括弧書きされている編集部注は削除しました。
入力：鈴木厚司
校正：佳代子
２００４年2月18日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。